

現場での OR チャレンジ精神を説く水野幸男氏

畑 昭彦

「OR 学会のさらなる発展には、支部の協力と活性化が大切な。各支部を廻って、意見交換をしようじゃないか。それとホームページのリニューアルが必要だ。ホームページによって学会と会員との心の交流が一層促進されることを期待したい」水野氏が OR 学会の会長になられた平成 10 (1998) 年のことでした。当時、NEC 副社長でおられ、その下にいた筆者 (当時学会の無任所担当) に話がありましたので、早速、北海道から九州までの支部に連絡をとり、3 カ月をかけ、水野氏と一緒に、各支部を廻り、支部長始め多くの支部の方々と意見交換をしました。

OR 学会の活動について、水野氏は、企業経営者の立場から、賛助会員数や産業界に在籍する個人会員が減少していることに、産業界の OR に対する評価が下がっているのではないかと危機感をお持ちでした。また、OR 学会の会員の減少に対して、会員の確保、増強に腐心しておられました。OR 学会の支部の活性化にとって重要なことは、地方の企業・公共団体が現在抱えている問題を公表し、支部を中心として産学協力の OR チームを編成して、その問題の解決を図ること。事実、支部の中には、具体的な成果を挙げている支部もあり、地方における OR 研究会、セミナー等を通して問題の公表を促進する「環境」作りも大切であると感じておられました。

水野氏は、1953 年東京工業大学工学コース卒業後、日本電気に入社、パラメトロン、二周波メモリの研究開発を担当され、NTT の CAMA システムの開発に参加されました。また、NEAC-2200 シリーズの基本ソフトウェアおよびアプリケーションソフトウェアなどの開発や、わが国最初のタイムシェアリングシステム (TSS) の開発にも参加されました。その後、NEC の経営に参画されることとなります (1993~5 年 情報処理学会会長)。このように、水野氏は、わが国のコンピュータ揺籃期におけるソフトウェア基本技術の開発に専心され、先駆的に多くの技法・技術・技能を持ち込み、日本の汎用機黄金期および情報シス

テム構築の基礎を築き、今日の情報化社会の発展に多大な貢献をされました。

1. OR を現場で 役立つものとする

「OR を生産現場で一層役立つものとして、その普及を促進すること」は水野氏がいつも口癖のように言っておいででした。



「わが国ばかりでなく、世界でも劇的な変化がおきているこのような時代に過去のルール、考え方、方法だけでは解決することが困難な多くの新しい問題が発生してきている。OR は、その歴史からも明らかのように、本来過去になかったような新しい問題を解決して高い評価を受けてきたので、若い OR ワーカーは、チャレンジ精神を燃やしながら問題に立ち向かってほしい」、また「OR を現場で一層役立たせるには、現場に存在する解決を必要とされている問題への積極的な挑戦が何よりも大切だ。現場の問題の中には、すでに開発された OR の手法により解きうる問題もあるが、現場の問題の多くは既存の方法では必ずしも解決できない問題で、それらの問題に対して、まずデータを集めることから始め、データに聞くということが大切ではないかと思う。データの中に解が含まれている」と現場での OR を強調されました。

2. 産学官の連携と OR

水野氏は、近年、劣勢に置かれた日本の産業界を再生するにはどうしたらよいか、その一つとして、若い技術者がチャレンジできる環境を整えるべきであると考えておられました。暗い話が目立ち始めた 1998 年、OR 学会を幹事とした学術会議のシンポジウムで唐津先生が、「日本はまだ物作りの面で強い底力を持っており、流通・サービスなどの次の日本経済のフロ

ンティアにおいてもそのパワーにより立派に切り拓ける」と言われたことで、意を強くしたようでした。

1999年の会長年頭のご挨拶でこの点に触れ、産業界の再生には産学官の相互連携が不可欠で、ORの研究、普及、実施活動が一層重要になるとの見通しを語られました。「わが国には、幸いなことに、世界的にみても高い水準の産・官・学の各界があります。これからは、大学・研究機関におけるORに関する研究、開発活動、産業界におけるORの普及、実施活動、官によるORに対する支援活動の相互連携が一層重要になると思います。具体的には、国および地方公共団体等が、現実に関心を持って解決を迫られている問題の中から、ORチームによって解決するプロジェクトを選定し、それを大学・国研・産業界に委託することからスタートします。その際、開発された新しい技術・理論の産業界へのすみやかな転移が重要であります。

技術・知識の転移は、人による方法が最も有効であり、大学の先生方が、一時他の機関、例えば民間の機関へスピンオフすることも大変良い方法であり、このようなことが、実際に行えるような制度の新設をすみやかに工夫する必要があると思います」

3. ORとIT (Information Technology) 技術の調和

インターネットが世界的な規模で情報インフラストラクチャーとして発展するのに伴い、われわれの社会も世界中の何処でも誰とでも自由に情報の交換ができるようになり、グローバルな情報社会、ネットワーク社会への移行へと発展してきました。

水野氏が北京で開催されたIFORSのEURO/WORKINGのセッションに参加されたときは、ユーロのOR活動がリアルワールドの問題に重点的に取り組み、教育・医療・環境・経済等の極めて複雑な問題に挑戦していることを認識されました。

これからのORはITによる情報ネットワークをベースにした新しいORが重要になってくるはずで、最適解、あるいはそれに近い解を得るためにもIT技術が必要です。例えば、生産・在庫モデルも情報・ネッ

トワークをベースにしたサプライチェーンマネジメントモデルのような統合管理型モデルになるでしょう。

水野氏は、経済のグローバル化時代のORを考えるため、1999年、戦後のORの誕生の地ともいえるMITを訪れ、旧友のスローンスクールのロバート教授に久しぶりに会われました。教授からは、ORは今後経済競争の分野、特に金融工学の分野で必要とされ、世界の経済情報を集めスーパーコンピュータでソリューションを求めるファイナンシャル・エンジニアリングが発展すると強く主張されました。水野氏もかねがねこの分野へのORの進展が必要であると感じとられ、今野先生をはじめ関係の先生方にOR学会による金融工学のセミナー、研究会の発足充実をお願いし、学会誌でも編集委員のご努力で「金融・証券ビジネスとOR」の特集号も発行していただきました。

さらに、産業界の急激な構造変化に対し、ORがリアルワールドの中で、いかに貢献し発展していけるかを理論的・実証的に考究する証として、創立40周年事業の一環としての統合プロセスのマネジメントに関する「統合オペレーション」特別研究プロジェクト代表を務められ、12ある研究グループを束ね、ご指導に力を注がれていました。この特別研究プロジェクトの発足に関し、梅沢豊先生ほか多くの関連の方々の尽力がありました。本プロジェクトは氏のご意志を継いで、「常設研究部会」として、新たに研究活動を続けることになりました。

水野氏のお人柄は、温厚で、読書や旅行、スポーツではゴルフを楽しんでおられました。NECでのソフトウェア開発プロジェクトリーダー時代は、妥協を許さぬ厳しさをもちの反面、その風貌から“オバQ”とあだ名され、部下から大変親しまれました。

日ごろから、ORに対する思い入れは変わらず、ORワーカーがチャレンジを忘れないよう、またORのさらなる発展を心から願っておいででした。水野氏が好んで使われる言葉に、「疾風に勁草（けいそう）を知る」があります。優秀な人は、厳しい環境に立ち向かっていける。ORワーカーも、時代とともに新しい発想でチャレンジしてほしいと言っておられました。